夜の語り部

ラフィク・シャミ著 松永美穂訳
西村書店 1996

経営学部准教授 **西口　拓子**

『夜の語り部』は、1989年にドイツで出版され、ミリオンセラーとなり、日本語をはじめ22以上の言語に翻訳されました。『千一夜物語』を彷彿とさせる構造で、枠物語の中に七人の男たちの語る話が織り込まれています。

物語の舞台はダマスカス、作者のラフィク・シャミが生まれ育った町です。つまりシリアの首都なのですが、シリアってどこにあるの？と思ったあなたも、心配はご無用。『夜の語り部』にこうあります。「シリアはトルコの隣国だ、と何千回説明したことか。それでも彼らはわたしをトルコ人と呼んだよ」。これはシリア人が折りにふれて体験することなのでしょう。シャミは自分自身の体験や知人から聞いた話をユーモアたっぷりに語る名手です。ここには昔話風の不思議な話だけでなく、アラブ風の値段交渉の駆け引き、賭け、なぞかけ、意地悪な役人など様々な挿話がちりばめられ、シリアに生きる人々が愛情とユーモアたっぷりに描かれています。

ドイツ語でベストセラーをいくつも書いたシャミですが、母語はドイツ語ではありません。シリアの公用語はアラビア語です。さらに家庭ではアラム語を使っていました。アラム語というのは、キリストが話していたという言葉で、今でもシリアのマルーラ村で話されています。両親がこの村の出身で、シャミの一家はキリスト教徒なのです。私たちが抱きがちなアラブ＝イスラム教という思い込みも、本書ではやんわりと揶揄（やゆ）されています。「ほんとにアラブ人なら、イスラム教徒なんだろう」と何度も言われることを、登場人物に嘆かせることによって。シャミの作品には、作者の政治的な態度が見え隠れしますが、本書では、語ること・聞くこと・読むことの面白さが前面に出されています。

シリアからは最近は悲しいニュースばかりが伝えられますが、ジャーナリスティックな視点からはちょっと離れて、そこに生きる人々に思いをはせてみるのはいかがでしょうか。